

各関係機関長 様

熊本県病害虫防除所長

病害虫発生予察予報について（送付）

このことについて、令和8年度（2026年度）病害虫発生予察予報第4号を発表しましたので送付します。

予 報

令和8年度（2026年度）病害虫発生予察予報第4号（7月予報）

I 主要な病害虫の発生予想概要

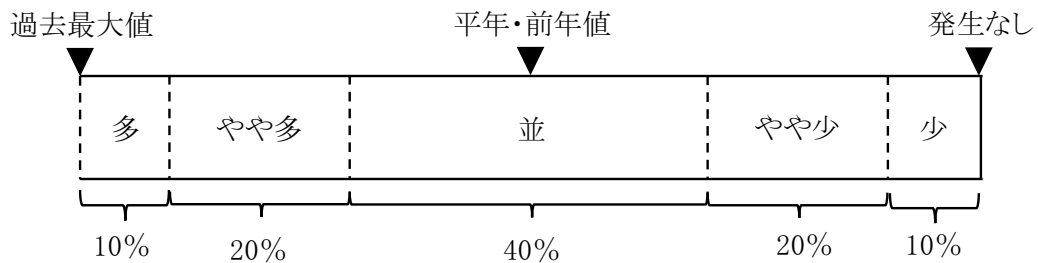
作物	病害虫名	6月の発生状況		7月の発生予想		
		早期	並	早期	並	前年比
水稻	いもち病 (穂いもち)	早期	並	早期	並	並
	いもち病 (葉いもち)	早植え・ 普通期	並	早植え・ 普通期	並	並
	斑点米カメムシ類	早期	—	早期	やや多	やや多
	トビイロウンカ	早植え・ 普通期	やや少	早植え・ 普通期	並	並
茶	炭疽病		やや少		並	並
	カンザワハダニ		並		並	並
	チャノミドリ ヒメヨコバイ		並		並	並
	チャノコカクモン ハマキ		やや多		やや多	やや多
	クワシロ カイガラムシ		少		やや少	並
かんきつ	黒点病		並		並	並
	そうか病		やや多		やや多	やや多
	かいよう病		やや多		やや多	やや多

作物	病害虫名	6月の発生状況		7月の発生予想	
			平年比	平年比	前年比
かんきつ	ミカンハダニ		やや少	やや少	並
	チャノキイロ アザミウマ		並	並	並
なし	黒星病		やや少	やや少	並
果樹全般	カメムシ類		多	多	多
トマト	灰色かび病	夏秋作	並	夏秋作	並
	葉かび病	夏秋作	並	夏秋作	並
	すすかび病	夏秋作	並	夏秋作	並
	うどんこ病	夏秋作	やや多	夏秋作	やや多
いちご	炭疽病	育苗ほ	並	育苗ほ	並
	うどんこ病	育苗ほ	並	育苗ほ	少
	ハダニ類	育苗ほ	やや多	育苗ほ	多
きゅうり	べと病	夏秋作	並	夏秋作	並
果菜類全般	コナジラミ類	夏秋作 高冷地	やや多	夏秋作 高冷地	やや多
		夏秋作 平坦地	並	夏秋作 平坦地	やや多
	アザミウマ類 (いちご除く)	夏秋作 平坦地	並	夏秋作 平坦地	やや多
野菜類全般	オオタバコガ		並	並	並

II その他の病害虫の発生予想概要

部門	7月の発生予想	(作物) 病害虫名
	平年比	
普通作	やや多	(早植え・普通期水稻) ヒメトビウンカ
	並	(早期・早植え水稻) 紋枯病 (早植え・普通期水稻) ツマグロヨコバイ
	やや少	(早植え・普通期水稻) セジロウンカ、コブノメイガ
茶	やや多	(茶) チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ
	並	(茶) ツマグロアオカスミカメ
果樹	並	(かき) 炭疽病
野菜類	並	(夏秋なす) すすかび病 (夏秋きゅうり) うどんこ病 (夏秋キャベツ) 黒腐病、コナガ (野菜類全般) ハスモンヨトウ

※ 発生程度は平年（過去10年間の平均値）・前年と比較し多～少の5段階で示している。



Ⅲ 7月の主要な病害虫の防除対策と留意点

水稻

1) 早期水稻

- ・穂いもちは発生後の防除が困難であるため、出穂前に予防防除を徹底する。ほ場を観察し、穂いもちの伝染源となる上位3葉に穂いもちの病斑が見られる場合は速やかに防除を行う。穂いもちの発生が多い場合は、穂ばらみ後期～穂揃い期に防除を行う。防除後に降雨が続く場合は、穂揃い期の7～10日後に追加防除を行う。
- ・斑点米カメムシ類は水田畦畔雑草から侵入するが、水稻出穂後の除草は本田への飛来を助長するので行わない。薬剤による防除は、アカスジカスミカメ等小型のカメムシが優占種の場合は穂揃い期とその7日後（乳熟期）に行うが、ホソハリカメムシやクモヘリカメムシ等が優占するほ場では、穂揃い期の3～7日後に1回目、その7日後に2回目を行う。2回目の防除後に生存虫や新たな侵入が認められる場合は、追加防除を検討する。

2) 早植え・普通期水稻

- ・移植後の補植用苗は病害虫の発生源となるため、不要になり次第処分する。
- ・前年にスクミリンゴガイの被害が発生した水田では、水深1cm以下の浅水管理に努める。薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤（メタアルデヒド等）と食害防止する剤（カルタップ等）があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- ・いもち病は、病害虫防除所のホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に穂いもち感染好適日の判定結果（BLASTAM）を掲載しているため、これを参考にほ場を観察し、発生初期に防除を行う。
- ・各種トラップへの海外飛来性害虫の誘殺状況を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考にほ場を見回り、早期発見、早期防除に努める。
- ・トビイロウンカは、梅雨時期を中心に海外から断続的に飛来すると予想される。箱施用剤の残効期間に留意し、飛来情報やほ場内の密度を定期的に把握し、払落し調査などで成幼虫数が要防除密度（7月下旬～8月上旬 20頭/100株）を超える場合は防除を行う。また、箱施用剤を使用していないほ場では発生に注意し、適期防除に努める。トビイロウンカは水稻の株元に生息しているので、液剤で防除する場合は株元に達するように散布する。

茶

1) 共通事項

- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、主な対象に合わせた薬剤の選定及び系統の異なる薬剤のローテーション使用に努める。

2) 虫害

- ・チャノキイロアザミウマ及びクワシロカイガラムシの有効積算温度シミュレーションによる各地の防除適期や、ハマキムシ類のフェロモントラップによる誘殺消長を病害虫防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するので、これを参考に適期防除に努める。
- ・ハマキムシ類の防除適期は、発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫期である。
- ・害虫の発生が二番茶摘採と重なるときは、摘採後速やかに防除を行う。
- ・カンザワハダニは、多発してからの防除では十分な効果が得られないので、園地をよく観察し、低密度時から薬剤防除を行う。

果樹

1) 共通事項

- ・各種トラップにおける果樹カメムシ類の誘殺状況及びチャノキイロアザミウマ、ナシヒメシンクイ、ナシマルカイガラムシの積算温度による発生予測を病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載し、随時更新するので、これを参考に園地を見回り、早期発見、早期防除に努める。

2) 病害

- ・かんきつでは、黒点病の保菌率が高い5～10mmの枯枝はせん除する。せん除後もそれらの枝は伝染源になるので、園外に処分する。また、果実被害を防ぐため、主な感染時期である梅雨期では、前回の散布から累積降水量が200mm～250mmを越えた時期、または25日～30日経過した時期を目安に防除する。
- ・なしでは、黒星病の発病葉と発病果実が周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出して処分する。防除は保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。開花期までの防除が不十分な園では、降雨のたびに感染が拡大するため、晴れ間を見て防除を行う。薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤をローテーション使用する。薬剤の年間使用回数はQoI系(FRACコード:11)、DMI系(FRACコード:3)及びSDHI系(FRACコード:7)がそれぞれの系統で2回、DHODHI剤(FRACコード:52)は1回を基本と使用する。

3) 虫害

- ・定期的に園を観察し、ハダニ類が多発する前に殺ダニ剤による防除を行う。マシン油乳剤を散布していないかんきつ園では、新梢葉でのミカンハダニの発生に注意し、雌成虫の寄生葉率が30～40%または寄生頭数が10葉当たり5～10頭に達したら薬剤防除を行う。ナシのハダニ類では、雌成虫の寄生葉率が20%以上または1葉当たり1～2頭に達したら薬剤防除を行う。
- ・果樹カメムシ類は、局地的に飛来し、被害をもたらすことがあるので、定期的に園を見回り、早期発見と薬剤による初期防除を徹底する。特に、山間部や山沿いの園地は被害を受けやすいので注意する。チャバネアオカメムシの越冬量については、令和8年2月10日付け病虫害発生予察技術情報第10号(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/301622.pdf>)を参照する。

野菜

1) 共通事項

- ・チョウ目害虫の発生状況については、病虫害防除所ホームページの「調査データ」(<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/201915.html>)に掲載するフェロモントラップへの誘殺状況を参考にする。
- ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

2) 病害

- ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める。
- ・ウイルスに対しては、発病株が二次伝染源となるので、見つけ次第抜き取り、直ちに処分する。トマト・メロンでは、ウイルス病抵抗性品種であってもウイルスに感染する。また、他のウイルス病には罹病するので、媒介する微小害虫の防除を継続して行う。
- ・いちごでは炭疽病菌のまん延を防ぐため、必ず親株ほ、育苗ほの雨よけを行う。頭上かん水は避け、株元へ手かん水を行う。発病株は早期にほ場外に持ち出し、ビニール袋に入れるか、土中深くに埋没処分する。

3) 虫害

- ・ほ場周辺および内部の雑草は、微小害虫の生息・増殖場所となるので定期的に除草する。
- ・微小害虫は気温の上昇とともに活動が活発になるため、「増やさない」対策を徹底する。本対策は微小害虫が媒介するウイルス病に対しても有効である。冬春果菜類の栽培地域におけるタバココナジラミ防除については、令和7年11月6日付け病害虫発生予察技術情報第9号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/294706.pdf>) を参照する。
- ・いちごでは、殺ダニ剤を散布する際は、令和7年5月1日付け発生予察技術情報第1号 (<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/279436.pdf>) を参考にして選定する。
- ・トマトでは、ほ場をよく見回り、トマトキバガによる被害の早期発見に努める。被害葉や被害果実は速やかに除去し、ほ場外に持ち出して適切に処分する。本虫に登録のある薬剤防除を行い、ハウス内の密度を抑制する。対策の詳細や薬剤の選定については、令和8年4月1日付け農業革新支援センター情報「トマトキバガに対する防除対策について」(<http://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/74/240009.html>) を参考にする。
- ・これから栽培を終了するほ場では「出さない対策」を徹底する。特にトマトやうり類では、微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。悪天候等で枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤の併用も検討する。地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫を完全に死滅させる。施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。また、密閉処理を行っても、ハウス周辺に野良生えトマトがあると保毒虫が残る可能性がある。そのため、ハウス周辺の廃棄トマトは早めに土中に埋めるなど適切に処分する。

F A X 版はここまで

発生予想の根拠等を含む詳細については、ホームページ掲載の電子版をご利用ください。
<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

IV 主要な病害虫の予想発生量（平年比）と根拠

- ※ 根拠各項に記した先頭の「○」は重視した根拠、「◎」は特に重視した根拠であることを示す。
- ※ 根拠末尾の（+）は発生を助長する要因、（-）は発生を抑制する要因、（±）は影響が少ない要因であることを示す。

九州北部地方の向こう1か月（6月27日～7月26日）の気象予報 福岡管区气象台発表

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	10%	40%	50%
降水量	40%	40%	20%
日照時間	20%	40%	40%

水稻

1) いもち病（穂いもち）

(1) 予想発生量 早期：平年並

(2) 根拠

- 6月の定点調査（6か所）では、葉いもちの発生株率1.3%（平年5.5%）と平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（2地域）によると、6月の葉いもちの発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。

2) いもち病（葉いもち）

(1) 予想発生量 早植え・普通期：平年並

(2) 根拠

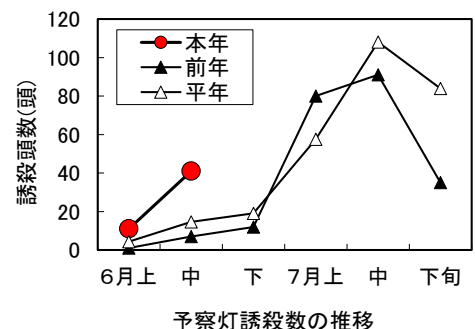
- ◎ 6月の定点調査（早植え10か所、普通期8か所）では、早植えの発病株率0.4%（平年1.0%）、普通期は発病を認めず（平年0.1%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（12地域）によると、6月の苗いもち（普通期9地域）の発生は平年比やや多～並、葉いもち（早植え4地域）の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。

3) 斑点米カメムシ類

(1) 予想発生量 早期：平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 合志市で優占種であるアカスジカスミカメの予察灯による6月第1～4半旬の誘殺数は、52.0頭（平年18.9頭）と平年より多く、増加するペースが早い（+）。
- 防除員報告（早期・早植え5地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。



4) トビイロウンカ

(1) 予想発生量 早植え・普通期：平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（早期6か所、早植え10か所）では発生が認められず（平年0.1頭/株）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 合志市に設置した予察灯及びネットトラップによる5月5半旬～6月4半旬の誘殺は認められず（平年0.8頭）、平年並の発生であった（±）。
- 防除員報告（早植え4地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

茶

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（8か所）では、発病葉1.9葉/m²（平年4.1葉/m²）と平年比やや少の発生であった（-）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。

2) カンザワハダニ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（8か所）では、寄生葉率1.3%（平年2.0%）と平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高く（+）、降水量は平年並か少ない（+）見込みである。

3) チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

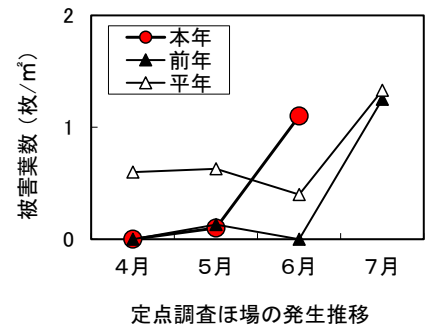
- ◎ 6月の定点調査（8か所）では、寄生葉率3.3%（平年2.9%）平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（5地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである（+）。

4) チャノコカクモンハマキ

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(8か所)では、被害葉数1.1葉/m²(平年0.4%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- 防除員報告(5地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- ◎ 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)。

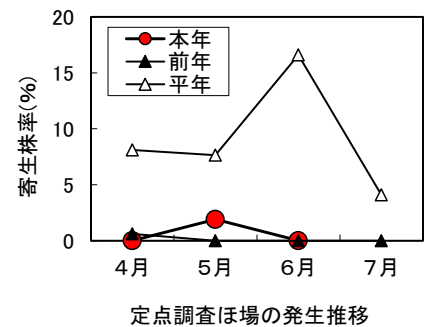


5) クワシロカイガラムシ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(8か所)では、寄生が認められず(寄生株率平年16.6%)と平年比少の発生であった(-)。
- ◎ 防除員報告(5地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)



かんきつ

1) 黒点病

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

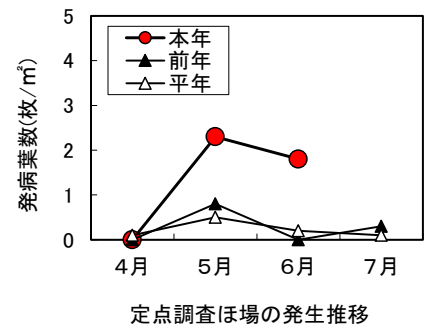
- ◎ 6月の定点調査(22か所)では、発病果率0.1%(平年0.0%)と平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである(-)。

2) そうか病

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(22か所)では、発病葉率1.8%(平年0.2%)と平年比多の発生であった(+)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである(-)。

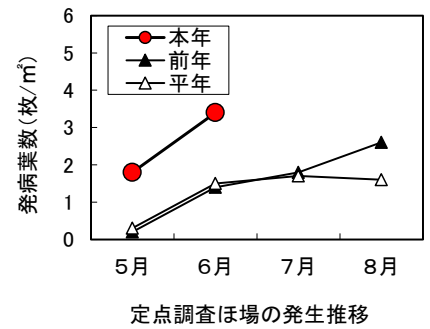


3) かいよう病

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(22か所)では、発病葉率3.4%(平年1.5%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年比やや多~並であった(±)。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである(-)。

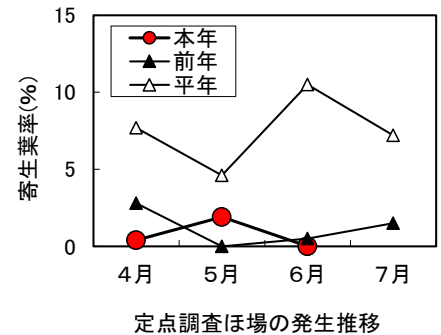


4) ミカンハダニ

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(22か所)では、雌成虫の寄生葉率0.0%(平年10.5%)、寄生頭数0頭/10葉(平年4.2頭/10葉)と平年比少の発生であった(-)。
- 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年比やや多~並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並か少ない(+見込み)である。



5) チャノキイロアザミウマ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(22か所)では、被害果率0.1%(平年0.5%)と平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年比やや多~並であった(±)。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)

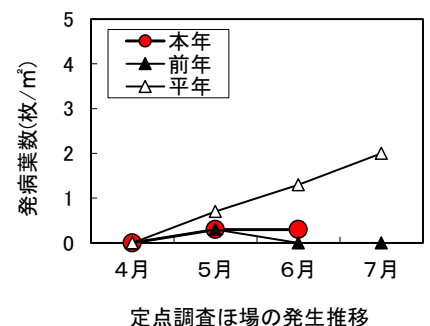
なし

1) 黒星病

(1) 予想発生量 平年比やや少

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(6か所)では、発病葉率0.3%(平年1.3%)と平年比やや少であった(-)。
- ◎ 防除員報告(3地域)によると、6月の発生は平年比並~少であった(±)。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである(-)。



果樹全般

1) 果樹カメムシ類

(1) 予想発生量 平年比多

(2) 根拠

- ◎ 4月～6月第4半旬までの予察灯によるチャバネアオカメムシ及びツヤアオカメムシの誘殺数は、各地点とも平年比多であった(+)。
- 防除員報告(7地域)によると、6月の発生は平年比やや多～並であった(±)。
- 向こう1月の気温は平年より高い見込みである(+)

果樹カメムシ類の誘殺状況

市町村名	チャバネアオカメムシ			ツヤアオカメムシ		
	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)	本年(頭)	平年(頭)	平年比(%)
合志市	483	196	246	1255	263	477
宇城市	8918	1242	718	11142	3329	335
天草市	13122	3360	391	12493	2684	465

※4月第1半旬～6月第4半旬の合計

トマト

1) 灰色かび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(6か所)では、茎葉での発病株率3.3%(平年1.5%)、果実での発病株率1.0%(平年0.1%)と平年比やや多の発生であった(+)。
- ◎ 防除員報告(2地域)によると、6月の発生は平年並～やや少であった(-)。
- ◎ 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである(-)。

2) 葉かび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査(6か所)では、発病株は確認されず(平年2.1%)、平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(2地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(-)、降水量は平年並か少ない(-)見込みである。

3) すすかび病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年並

(2) 根拠

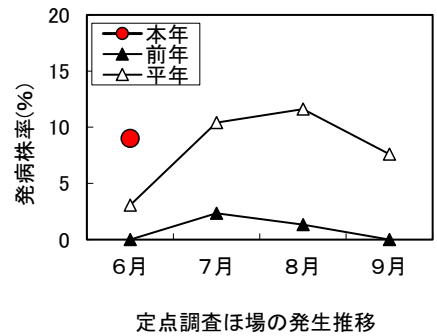
- ◎ 6月の定点調査(6か所)では、発病株は確認されず(平年0.5%)、平年並の発生であった(±)。
- ◎ 防除員報告(2地域)によると、6月の発生は平年並であった(±)。
- 向こう1か月の気温は平年より高く(+)、降水量は平年並か少ない(-)見込みである。

4) うどんこ病

(1) 予想発生量 夏秋作：平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（6か所）では、発病株率9.0%（平年3.1%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- 防除員報告（2地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。



いちご

1) 炭疽病

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年0%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。

2) うどんこ病

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年並

(2) 根拠

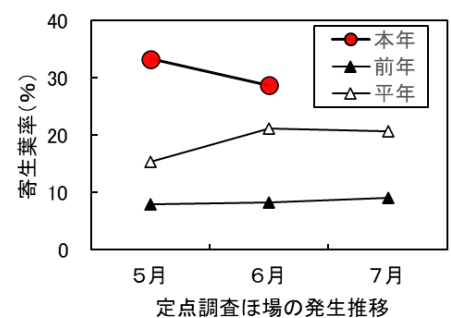
- ◎ 6月の定点調査（6か所）では、発病株は確認されず（平年0.9%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の降水量は平年並か少ない見込みである（-）。

3) ハダニ類

(1) 予想発生量 育苗ほ：平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の定点調査（6か所）では、寄生葉率28.7%（平年21.1%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- 防除員報告（3地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。



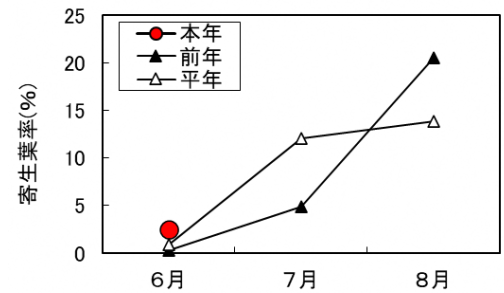
果菜類全般（夏秋作高冷地）

1) コナジラミ類

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 6月の夏秋トマトの定点調査（6か所）では寄生葉率2.5%（平年0.9%）と平年比やや多の発生であった（+）。
- ◎ 防除員報告（3地域）によると、6月の発生は平年やや多～並であった（+）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。



定点調査ほ場の発生推移
(夏秋トマト)

果菜類全般（夏秋作平坦地）

1) コナジラミ類

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 防除員報告（3地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

2) アザミウマ類（いちご除く）

(1) 予想発生量 平年比やや多

(2) 根拠

- ◎ 防除員報告（4地域）によると、6月の発生は平年比やや多～並であった（±）。
- ◎ 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

野菜類全般

1) オオタバコガ

(1) 予想発生量 平年並

(2) 根拠

- ◎ 6月の夏秋トマトの定点調査では寄生株は確認されず（平年0.0%）、平年並の発生であった（±）。
- ◎ フェロモントラップによる5月第5半旬～6月中旬（7月発生の前世代成虫）の誘殺数は、八代市で平年比やや多、阿蘇市で平年並、山都町で平年並、合志市で平年比やや少であった（±）。
- ◎ 防除員報告（7地域）によると、6月の発生は平年並であった（±）。
- 向こう1か月の気温は平年より高い見込みである（+）。

V 農薬安全使用

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう飛散防止を徹底し、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

VI その他

本情報は病害虫防除所のホームページにも掲載しています。

病害虫発生予察情報に関する詳細な内容等については、病害虫防除所（農業研究センター生産環境研究所内、電話096-248-6490）にお問合せください。

ホームページを
チェックだモン！



©2010 熊本県くまモン